

年間第四主日

第一朗読 エレミヤ 1・4-5、17-19

第二朗読 一コリント 12・31～13・13

福音朗読 ルカ 4・21-30

2022.1.30

カトリック高円寺教会

ジョン・ジュン神父（クラレチアン宣教会）

これは多分、皆さんが経験したことがあると思います。友だちに本当のことを助言しても、相手が受け入れてはくれない、ズバリと否定されたり、聞こうともせず拒否されてしまうことです。旧約でも預言者は同じように断られていました。イエス様も例外ではありませんでした。

紀元前627年、エレミヤは20歳くらいの時、預言者として召命されました。彼は非常に優秀でした。聡明で観察力を持っている青年でした。彼は故郷アナトト城で平和に暮らすことを望んでいました。しかし、彼が母の胎内にあるときから選ばれていたため、困難と危険が伴っていることも彼の使命となりました。彼は、神様の目を通してこの世界を見ることができました。当時は他の預言者と司祭が詐欺行為を行っていて、エレミヤは彼らの行為を批判しました。神様は自分の預言者を慰めました。“誰かがあなたを攻撃しても、わたしはあなたと一緒にいます”と。

コリントの教会への手紙： 以前、日曜日にコリントの教会の中で少し問題が起きました。原因は様々な賜物を理解できないことで、分岐と嫉妬が生まれました。パウロの教えるのは“賜物は聖霊から来ています、賜物の目的はコミュニティーを作るために”ですから、パウロは言いました。賜物は神様からの愛です。愛があれば全ての賜物が優れます。彼にとって、本当の愛は占有ではない、美しさを作ることです。

ルカによる福音書： 今日の福音は先週の日曜日の続きです。わたしたちが理解できないのは、“なぜイエス様の故郷の人たちが彼に対して、彼を殺すまで敵意を抱いたのか”。

彼らが信じていたのはイエス様が起こしている奇跡です。イエス様は地元でも奇跡を行うことはできますが、イエス様は何にも行いませんでした。ルカはイエス様が拒否されたことを福音の一番最初の公開生活に記していました。

ナザレの会堂で起こったことはイエス様のミッションの縮図です。この序曲がイエス様の宣教で、わたしたちに送ったメッセージは、貧しい人と弱い人たちを救うことです。イエス様の話しは彼らの敏感なところに触れてしまい、心のベースラインに触れてしまった、ということです。この箇所の記事がとても面白いです。この記事から、彼らがイエス様に対する敵意が生じ始め、抵抗感が強くなったと思われます。これらの原因はイエス様の話の半分に過ぎません。

彼らは記載されていることをよく知っていました。“主の恵みの年を告げるためである（イザヤ61・1）”。実は次の言葉は“わたしたちの神が報復される日を告知して嘆いている人々を慰め”と記していましたが、イエス様はこの箇所を読みませんでした。だから彼らは怒りました。彼らはイエス様が報復される日の告知を読むのを聞きたいのに、イエス様の朗読が止まりました。読まなかった！ 彼らは神様が支配者を裁かれることを望んでいました。なぜかイエス様は“主の恵みの年を宣言しました”。だから、彼らはイエスに敵意を持つようになりました。イエス様と彼らの観点は全く違っていました。

“預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ” イエス様は彼らに期待していませんでした。

“イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた”という話はイエス様の奇跡ではない。いなくなることもない。ルカが伝えたいことは、敵意や誤解そして迫害など、反対される時も、失望ではなく希望持ってください。ということです。

皆さんもわたしたちも、自分の生活の中で、否定や敵意、迫害や反対の声に直面するとき、諦めないでください。イエス様も同じような経験を持っていました。イエス様がわたしたちと共にいます。わたしたちの信仰を強め強めてくださいますように祈りましょう。